



## 随筆

### 恐雷記

滝山徳三

私ほど雷をこわがる人間は少ない。

ある年、夏休に入ると、学生は北小松のキヤムプに行ってしまった。私は翌日の昼から独りでおくれて行くことになった。その頃はまだ江若線に乗るより他になかったので浜大津に出た。そこで時間を待っている間、駅構内の靴直し屋で踵に金をうちつけて貰うことにして、靴を脱いだ。その途端に、どこからともなく遠雷が聞こえてくるではないか。私は理不尽な理窟をつくって金をつけて貰うことを止めた。つまり、どんなに小さくても金属類をこの身につけることを避けた。そ

れから、墓口から有りつたけの硬貨を取出して、要りもしない週刊誌を買った。これとしても、金属類をこの身から放って終いたいから。「つまりらないことを、気やすめじやないか」と笑う人があるかも知れないが、どうしてどうして、私にとつては、真剣そのものであった。

去年の夏、家の近くに大きな雷が鳴って、後で聞くと、女学部の家政館前の電柱にも黎明館にも落ちたそう。私は雷の鳴る日は、朝から気分がわるい。この日も朝からそわそわしていると、果たせるかな、夕方になって、一天にわかには掻きくもり、大粒の雨がポツリポツリ落ちてきた。独り留守居をしていたので、かねがね避難所として心に決めていた新心寮にと急いだ。舎監の清水先生に「ちよつと出町まで行った帰りですが、雨宿りを……」と嘘をいって玄関に立った。先生は親切に「どうぞ応接室で雨が止むまで……」と言つて下さつたが、応接室は余り外に近いので、つかつかとローカを真直に建物の中程まで上がりこんで行った。ここならどんな雷でも大丈夫、と気の大きくなった私は、寮生を見まわしながら「雷なんか、滅多に落ちない

ですよ」と澄していた。俯仰天地に恥じるべきだ。

どうして、こんなに雷がこわいのだろう。

私は子供の頃、名うての腕白：関西の方言では「やんちゃ」「どんならず」：だった。夏の日、夕立がくると、雨の中を面白がつて、真つ裸のまま、庭に据えてある大きな金魚鉢の水を手で掻きまわして得意がった。母が「そんなことをしていると、ポンポンが冷えて、お腹痛になりまっせ」と叱つても、いっかな聞き入れなかつた。ある日、篠つく雨、真白い稲妻、途端にビシヤリ。母に「そら、雷さんがお臍をとつてゆくワ」と嚇されたので、そんなものをとられては大変と両手でお腹をおさえながら座敷に駆け込んだ。祖母は「こつちへおいで」と言つて、私を引き寄せ、お臍を掻くちやの手で撫でまわして、「もうこわいことあれへん」といつて、蚊帳をつつてくれた。この時のことが、余程骨身にこたえたものか、雷はこわいものと思ひこむようになった。

以来、夕立の夏を重ねること五十有余年。母や祖母はなつかしいが、雷だけは、今なおこわい。

(女子大学名誉教授)

## 香　　り

村田竹治郎

数日前滋賀県の三上山の中腹へ松茸狩に行った。この夏の照りが強く、かつ長かったので非常な不作を覚悟はしていたが、有名な茸山でもある故、宣伝にもせられて多少の期待をもつてかなりの高さまで登った。そこには数ヶ所に茸蕈の設備もあり、すでに数十人のスキ焼も始められていて、空腹にたまらぬよい香りがしていた。私どもはもう少し奥の茸蕈の席へ案内せられた。ほかに上下三組程の席もあった。ところが一向に茸狩への案内人も来ない。催促して山番二人をつれて奥深くわけ入って、裏白や蕨の茂ったところを教えられるままに気長く探したが、山番が二本を見つけてくれただけでほかにはついに一本もなかった故、数人の一行がその二本を見物したのであった。再び一行は自分らの蕈に帰って思うに、ほんとうに今年は不作だなあ、道理で山への最初からスキ焼の香はしたが、新

鮮な松茸の香りはなかった。そこで思うことは、このごろの同志社に同志社の香りがあるであろうか。かつて安藤狂四郎という京都府知事があつた。赴任したとき、「京都へきたらもつと同志社の香りがすると期待していたが一向ないなあ」と歎息せられた。それは戦前もずっと前のことであつた。いらい戦後世はますますマスコミ時代になって、大学生も先生の数も急増した。不作の茸山にはスキ焼の香りはするが、松茸の香りはせぬ。安藤知事がもらしたように同志社がその学生、生徒数万におよぶ膨大な量の発展をとげたとしても、同志社人の集いとしての学園全体が、また一人一人の同志社人として、その大切な香りを失つたとしたら、これにまさる残念なことはない。花にもまして、その大切な生命は香りである。同志社の現状のさまざまのことを考え、これでよいのだろうかと思案するのは、はたして私の世代と年齢のゆえのみだろうか。やはり山に松茸がないせいであろうか。同志社に同志社の祈りと願いが充滿していたら、いま少し松茸の香りがあつてよいものと思う。

おりから同志社当局は三年後の九十周年の

ために大募金をはじめられた。日夜東奔西走、非常なご苦労である。これに加えて世は不景気の谷底であるが窮すれば必ず通ずる。一陽来福という言葉もある。かような困難なときに死力をつくされてこそ、ものは成就するのである。そしてもつと、もつと同志社を香りのある学園にして下さい。物質的設備のあとに、今日の努力をさらに精神教育に打ち込んで下さい。茸山の評判はまだまだよろしい。世間の期待も大きい。来年の松茸は必ず豊作であろうし、また豊作であらしめたいと、私は願っている。

(校友会長)

## 河童を作つた砦

酒　詰　仲　男

長崎県五島福江島へ発掘に出掛け、連日砂丘の原始墓を調査している間に、団員一同疲労の兆が見えたので、一日鋭気を養うため、大浜の続きの富江町へ赴いた。この町の海岸には、すくなくとも二箇處倭寇の砦がある。

その一つは樺島（かかしま）と言うところで、そこで昼

食をとった。この島の名山鬼岳を頂点に大きく彎曲して来る熔岩の突端には、東支那海の夏濤が間遠に白い飛沫を揚げている。一点の雲なく晴れた夏の日だった。ここに安山岩を四角に切つて積みあげた、小じんまりした見張所と、住居址がある。福江市の倭寇の巨魁明王の居処とも似ているから、間違なかろう。

この五島が、支那大陸から呂宋、その他の南方河域にまで活躍した、中世の**八幡船**の根拠地の一つだったのである。ところが土地の人は、何故か、その建設を可成新しいものと解釈している。その面白い例は次に述べる勘次ヶ城である。

勘次ヶ城と言うのは周濠もあり、本丸も遺つていて仲々立派なものである。勘次と言う船大工がいて（これが江戸時代の話だと土地の者は言うが）専門の技術は相当のものだったが、頭の方がすこし不足していた。船を造りかけにして、急に時々姿が見えなくなる。はじめのうち人は余り気にとめなかったが、何しに行くのか段々話題になりはじめた。遂にある時物好きな男が勘次の跡をつけて見た。すると浜辺のアシの間いつか彼の姿が消えてしまう。何回も尾行を続けた後に、遂

に彼が二つの大きな岩の間に入つて行くことがわかった。何となく異様なものを感じて、よくよく観察してみると、それが実に巨大な岩であることが解つたと言うのである。うすのろの勘次が、何でこんなものを作つたのだろう。人々は勘次を詰問した。それに対する勘次の答えが面白い。彼は河童と一緒にこの城を作つたと言うのである。倭寇の城にどうしてこんな解釈が生れたのか、私にはその方がむしろ不思議である。

前述の樺島の手前に女亀めがまと言う遺跡があつて、人頭大の磯石を除けると、その下から縄文土器や、石斧が、ポロポロと出て来る。この遺跡の入口に、安山岩で四方を囲んで、その片側を片廂で包んだ構造物がある。この中にも現在勘次のような人物が棲んでいるのである。人はその石垣をよじ登つて声を掛ける。返事がないと、廂をのぞき込んで「今日は街へ行つてゐるらしい」と人は言う。私も仲間によらずに登つて見ると、汚いバケツと、土間にあやしい鍋や釜がぼろ布と一緒に散らかつていた。夏日が容赦なく照らし、ハイがむらがつている。これが現代の勘次のような気がフツした。それも入口もない、人里離れ

た磯馴松の間にこの男は何を考へて暮らしているであろう。傍に青く激んだ泉があつて、トンボが飛んでいたが、その底にこの勘次の河童の友達でも潜んでいるのではなからうか。ただ見廻わしても岩が作りかけられていそうな形跡は認められなかった。

（文学部教授・先史学）

## 無処罰主義

藤井正三

「無処罰主義」は同志社の伝統であるといふ説がある。キリスト教の「愛」と民主憲法の「人權」の二つの思想に基づく主張かと思う。

今から四十五年の昔、同志社中学に籍をおいていた頃のことであるが、一日、学友七人とボートを石山まで漕ぎ、茶店で昼弁当をとつて一服している間に、ちようど、石山へ遊びにきていた祇園の舞妓にせがまれ、ボートに乗せてやつて付近を周遊したものがあつた。それを見つけた七人のクルーの間で大問題になり「神聖な同志社のボートに芸妓を乗せる

とはけしからん。そんな穢れたものには俺たちはもう乗らぬ」と大憤慨して、京都まで歩いて帰ってしまった硬骨漢もあった。翌日、波多野教頭に実情をのべて「どんな処罰をも受けます」と陳謝した。暫く考えていた先生は「実になげかわしいことをしてくれた。今から直ぐに塩とタワシを持って、ポートの内外をきれいに洗い清めてこい」ときついお叱りであった。授業を休んで皆がその通りにしたことは言うまでもない。

中学三年のときのことである。北寮でYという寮生に風紀上よからぬ噂がたつた。憤慨したAと二人で、早速、教頭室を訪ね、「同志社の風紀を乱すかかる学生は即時放校処分にしてもらいたい。そうしてくれないければ我々二人は退学する」といきりたつたものである。「それは本当のことなのか」との問に対して「実際に見たことはないが、皆の噂である」と答えざるをえない薄弱な根拠しかない話であったが、先生は「よく調べた上で考えよう」と答えられた。まもなく夏休みにになり、九月の学期初めに学校へきて、大阪の府立中学へと転校したことを知ったが、波多野先生の思慮深い取り計らいであったに間違いない。

ない。

「無処罰」とは、どんなことを意味するか知らないが、違反のあったものが不問に付せられるということではなからう。ペナルティのない民主社会というものが存在しうるものであろうか。それとも、教育の場で、ことに基督教主義の同志社であるから、処罰は断じて許されないというのだろうか。もし、処罰の方法についていうのなら、私にも判るような気がするが、それは「無処罰主義」とは言えないのではなからうか。

学校では、教育効果というものが何よりも先ず考慮されるべきである。無処罰が、単なる偏狂な屁理窟や、柄にもない猿真似式に行われたとしたら、恐ろしいことになる。新島先生をはじめ、同志社教育の諸先輩達は、相手を責める代りに、自分を責められたし（そこには処罰があった）、何はさておいても、関係当事者を含めて全体を生かす工夫を忘れられなかった（社会的影響が重視された）、そして、あたかも「処罰すらなかった」かの如き立派な処罰が厳然として、自然に行われたよ同志社であったように思う。

（藤井大丸会長）

## 下風呂にて

久永省 一

この夏、東北に一人旅をした。ハンチングをかぶり、リュックを背負い、はきなれた登山靴という姿で、みちのくの自然の中に身も心も埋めた。この姿のために、魚の買付けの商人とまちがわれることもあった。

花巻から釜石、宮古と廻り、そこから日本のチベットと言われる浅内の方面に分け入り、ふたたび陸中海岸に出た。この海岸はその皺がリアス式をなして、高い断崖が多くの屈折を見せて連なっている。幸いに岩手日報の記者達が貸切りの小蒸気で納涼読物の取材に来ていたのでこれに便乗させてもらって、海からこの迫力のある風景を眺めることができた。北海道を吹き荒れた台風の余波で黒い雲がちぎれ飛び、波が高かった。私は波しぶきを浴び、奇怪な形の岩礁が現われては消えるのを見やりながら、思いを元治元年（一八六四年）に走らせていた。

新島先生はこの年の三月、品川沖から快風丸に乗られて、北上された。三月十二日から、函館着の四月二十一日まで、四十日もかかっていられる。その間、船は何度も暴風雨に会ったらしく、あちこちの港に寄っている。砂子浦、仲の柵(今の中ノ作)、鍛ヶ崎など。この鍛ヶ崎は宮古湾の北にある小さな漁港で、先生はここに六日ほど泊られた。先生は船上から、この荒あらしい岩壁を見つめ、どのような夢と情熱を投げつけていられたことだろう。

私は普代で陸に上り、バスで久慈に向った。バスから海岸線の山々が赤茶けて見えた。昨年、大きな山火事がこの地方一帯に起って、赤い山肌はそのあとなのだ。一昨年は津波が襲って、どの入江の漁村にも哀話の一つや二つは残っている。津波があれば人びとは山に逃げ、山火事があれば海に入り、首までつかって、難を避けたという。久慈の宿は静かな町外れにあった。広い宿に泊り客は数人しかいない。庭の芝草の上に寝ころぶと、吹きわたる風も、空の青も、もう秋のものであった。私は野辺地から下北半島を北へ向い、恐山へ廻った。ここは北の果の靈地で、子を失っ

た母達が巫女の媒介によって、冥土から亡き子の魂を呼び招くためにお参りをする。潤葉樹に包まれた美しい山湖の片隅に、硫黄くさい灰色の岸辺がある。この辺だけが病み朽ちたような異様な風景をつくっているのだが、

### みちのく抄

那須 乙郎

中尊寺

金色の闇ほのぼのと朝の蟬

毛越寺址

石組のわづかにのこり秋燕

啄木出生地

野分立つ雲に肩欠け南部富士

小岩井

秋風の仔馬顔よせ愛撫待つ

八戸鮫角岬

海に没るまでの日のいろ雁わたる

ここに恐山の寺がある。冬の季節にでも来れば、その不気味さに身も氷る思いがするであらう。

私は山を降って、汽車で大畑へ、さらにバスで下風呂に走った。下風呂にある幾つかの宿の中、思い切って一番古く大きな宿を訪ねた。一人客は断られることを覚悟したが、都合よく一部屋が空いていて、快く通された。新島先生は四月十八日と十九日に、この下風呂温泉に泊られた。その当時は霜風呂と書いたらしい。先生が入湯されたのは、あるいはこの宿の湯であったかも知れない。夜、湯舟につかりながら、ガラス窓を通して、沖を眺めた。星明りの空の下に、遠く低く、黒い山影が水平線に尾を引いている。北海道の函館の辺の山の稜線である。砂粒のような灯が明滅している。港の灯であろうか、それとも漁火であろうか。新島先生はこの灯を焼きつくような思いで眺められたことであろう。その昔をしのびつつ、私もその灯をあかすに見つめていた。けたたましい声が空を渡った。海鳥の声である。海峡を渡る鳥の声は、心に喰い入るほどわびしかった。

(中学校長)